

# 英米文化学会会報

第 84 号

平成 22 年 7 月 15 日



1997年に中国に返還された後、英植民地だった香港も今や英語圏から脱して中国語圏、いや廣東語圏になりつつある。経済的な発展は旧と変わることはないが、文化の中国回帰が急速に進んでいるようだ。(香港・南蓮園池にて 撮影：佐野 2010年6月)

## 目次

- ◆ 大会担当より 英米文化学会第 28 回大会のお知らせ
- ◆ 分科会担当より 分科会報告
- ◆ 学術担当より 学会誌『英米文化』第 41 号初代会長大島良行先生追悼号  
論文募集
- ◆ 財務担当より 会計報告・予算
- ◆ 事務局より 会員消息

## ◆英米文化学会 第 28 回大会のお知らせ

(大会担当理事: 松谷明美)

日時：平成 22 年 9 月 11 日(土) 午前 9 時 30 分～

場所：法政大学市ヶ谷キャンパス「外濠校舎」3 階 S306 教室<地図は 5 頁>

交通：JR 総武線および東京メトロ有楽町線・南北線市ヶ谷駅・飯田橋駅徒歩 5 分、  
都営地下鉄新宿線・大江戸線市ヶ谷駅徒歩 5 分、東京メトロ東西線飯田橋駅徒歩 5 分

懇親会会場：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアノードタワー 25 階スタッフルーム

会費：2,000 円 午後 6 時 00 分～ 懇親会のみ参加も歓迎いたします。

<受付> 9:00 -

<会長挨拶> 9:30 - 会長 小野昌 (城西大学)

<シンポジウム> 9:40 - 12:00

「南北戦争とアメリカ文学 — それぞれの時代と視点から」

君塚淳一	(茨城大学)	コーディネーター
松本昇	(国土舘大学)	ゲストスピーカー
上野和子	(昭和女子大学)	
佐野潤一郎	(創価大学)	
古木圭子	(京都学園大学)	
中垣恒太郎	(大東文化大学)	
田中浩司	(防衛大学校)	
河内裕二	(明星大学)	

南北戦争(The Civil War, 1861-65)は、北と南に分裂したアメリカを統一せんと、奴隷解放をも大義として掲げ、結果としてアメリカ歴史上、稀に見る戦死者数を出した内戦であった。その中心にいたエイブラハム・リンカーン(1809-65)は、昨年が生誕200年。一方で *Uncle Tom's Cabin* (1851)を執筆したハリエット・B・ストウ夫人(1811-96)は、来年が生誕200年となり、その中間となる今年 2010 年に、このようなシンポジウムを開催し、南北戦争を読み直すことは有意義であると思う。

今回のシンポジウムは、まず君塚淳一(茨城大学)がコーディネーターとして発案し、特に時代を超えてストウ夫人の *Uncle Tom's Cabin* とマーガレット・ミッチェルの *Gone With the Wind* (1936)を、戦争前と戦争後の点から論じる。また、戦争前ではゲストパネリスト参加の松本昇(国土舘大学)が、「南北戦争前夜の文人たち」というテーマでジョン・ブラウンとエマソン、ソローなどの超絶主義者が、逃亡奴隷を逃がす組織「地下鉄道」といかに関わり、それが南北戦争へ至ったか」を。一方、上野和子(昭和女子大学)は、同時期の女性活動家リディア・マリア・チャイルドがボストン女性奴隷廃止協会やニューヨーク・ジャーナリズムを通して、いかにこの戦争に貢献したか、colonization society や *A Romance of the Republic* (1867)に触れつつ論じる。

戦後の作品分析については、佐野潤一郎(創価大学)がマーク・トウェインの“The Private History of a Campaign That Failed”(1885)を。古木圭子(京都学園大学)がブロンソン・ハワードの *Shenandoah* (1889)を。中垣恒太郎(大東文化大学)がスティーヴン・クレインの *The Red Budge of Courage* (1895)を。田中浩司(防衛大学校)がフランシー・オコナーの“A Late Encounter with the Enemy”(1953)を。河内裕二(明星大学)がE・L・ドクトロウの *The March* (2005)を、各分野から論じる。

南北戦争を再考すると共に、アメリカ文学そして作家との関係、また作品ではどのように描かれているのかを、研究者それぞれの視点から論じ、新たな視座が見つけられればと思う。今回はアフリカ系や先住民などをはじめ、少数民族作家からの発表はないが、論の中では補足する。

1. <タイトル> ジェイムズ・ジョイスと脱近代  
<発表者> 坂井竜太郎 (千葉工業大学)  
<司会者> 小田井勝彦 (専修大学)

近代小説の伝統から離脱したと言われるジェイムズ・ジョイスの作品群には、近代を問題化し、それを超えていこうとする要素が数多く見られる。

西洋中心主義、合理主義、植民地主義、ナショナリズム等さまざまな問題が、西洋近代をめぐる問題として指摘されているが、ジョイスのテキストを読むことは、それらの諸問題と、その超克を目指す諸運動の可能性と限界を見定めることでもあるだろう。ジョイスは、ポストモダンと呼ばれる思想運動が生まれる以前において、それらの諸問題を尖鋭に意識し、そこからの離脱、超克の道を探っていたのである。

本発表では「死者たち」に描かれた、近代に対するアンビバレントな見方の分析を皮切りに、西洋近代に対してジョイスがどのような問題意識を持ち、それをどのように乗り越えようとしていたのかを明らかにしたい。

2. <タイトル> 『指輪物語』における Riders of Rohan  
— トールキンの理想の騎士像をめぐって —  
<発表者> 長谷川千春 (鶴見大学大学院)  
<司会者> 相良英明 (鶴見大学)

オックスフォード大学で古英語や英文学の教鞭をとっていた J. R. R. トールキンは、伝説や神話を『指輪物語』の中に多く組み込んだ。その中でもローハンの騎士 (Riders of Rohan) に関して John Tinkler や T. A. Shippey らは、『ベオウルフ』の言語や文化が表れているということを指摘している。

本発表では、ローハンの言語や文化に関する先行研究を踏まえ、『ベオウルフ』のみならず、タキトゥスの『ゲルマニア』にも影響を受けたとも思われるローハンの騎士の行動規範—死を恐れない勇気、名誉と恥の意識、主従関係の本質—に着目し、従来アラゴルンの英雄性の影に隠れていたローハンの騎士が、作品の中で一つの理想的な騎士像として描かれていることを立証していきたい。

さらに、このようなローハンの騎士の行動規範を、主君セオデンや騎士エオメルを中心に論じていくだけでなく、ローハンとゴンドールの騎士たちとの関係、ホビット族から見たローハンの騎士など、他の登場人物たちとどのように関わり、思われているのかを分析し、トールキンが『指輪物語』というファンタジー作品の中で、『ベオウルフ』や『ゲルマニア』に表れるような行動規範を持つローハンの騎士に、他の登場人物の行動規範にも影響を与える役割を持たせている、ということを検証することによって、作品におけるローハンの騎士の重要性を浮き彫りにしたい。

3. <タイトル> 革命という場、<クイア>な情景  
—ジョージ・オーウェル『カタロニア讃歌』再考—  
<発表者> 福西由実子 (中央大学)  
<司会者> 越智敏之 (千葉工業大学)

ジョージ・オーウェル『カタロニア讃歌 (*Homage to Catalonia*, 1938)』は、彼がスペイン内戦に共和国軍の一兵士として参戦した 7 ヶ月間の体験を記録したルポルタージュである。この作品を、本発表では、作中頻出する「奇妙な」(queer)という言葉を手掛かりに読み解いてゆく。作品冒頭で出会う民兵、1936年12月のバルセロナ、アラゴン戦線の雰囲気、ファシスト将校との握手、妻のベッドを探索しない「紳士的な」警察の印象など、オーウェルにとっては全て「クイア」である。この語を繰り返し用いて、彼にとってある意味デュオニソス的な革命という場を描くとき、明らかに他の言語とのレベルが違ってくる。これがオーウェル独自の身体感覚につながっていることを論じたい。さらに、オーウェルと同時期にスペイン内戦に参戦したアーネスト・ヘミングウェイが、左翼系雑誌ファクトに寄せたルポルタージュ『スペイン戦争 (*The Spanish War*, 1938)』との比較も行う予定である。

<研究発表第2部> 15:15 – 17:15

4. <タイトル> 「永続」と「純粹」  
—19世紀末から20世紀初頭のイギリスにおける  
テンペラ技法の精神的意味—  
<発表者> 堀川麗子 (愛国学園大学)  
<司会者> 内田均 (横浜美術大学)

15世紀後半における油彩の導入以降、絵画技法としてほとんど用いられなくなっていたテンペラは、19世紀末のイギリスでイタリア初期ルネサンス絵画への関心を契機に「再発見」され、その後複数の画家たちが自らの絵画制作の中心的技法として取り入れた。バーミンガムとロンドンを中心に展開されたこの芸術運動を「テンペラ復興運動 (Tempera Revival Movement)」と呼ぶことができる。

本発表では、テンペラ復興運動に関わった芸術家たちがテンペラという前近代的技法にどのような精神性を見出だしていたかを探る。彼らはテンペラを油彩と対比させることでその物質的特性を際立たせ、さらに美点となるような精神性と結びつけようとしている。特に彼らが強調するテンペラの「永続 (Permanence)」と「純粹 (Purity)」という側面に焦点を当てて当時の言説や絵画作品の分析を試みる。

5. <タイトル> D. H. ロレンスの伝記と研究の接点  
<発表者> 川田伸道 (同志社大学)  
<司会者> 須田理恵 (日本大学)

D. H. ロレンス作品研究と伝記的事実との関係は強いものだと捉えられてきた。たとえば、ハリー・T・ムアは、*The Pries of Love: The Life of D. H. Lawrence* (1954) において、書簡などの一次資料を独自のヴィジョンによって取捨選択し、理想的な「天才」作家像を構築し、ロレンス研究の動向を操作した。ムアとは対照的に、ウィッター・ビナーは、その回想録 *Journey with Genius* (1951) の中で、ロレンス作品において表象される「英雄」的ロレンス像と「事実」の差異を詳細に指摘し、確立された作家像に挑戦を試みている。その姿勢は、ロレンスへの個人攻撃であるとムアによって批判されている。しかし、ビナーの回想録を個人攻撃の書であると捉えることが果たして妥当であろうか。彼の細部にわたる指摘は、ロレンスが事実をどのように取捨選択、強調し、自らの創作に取り込んでいたかを示し、ロレンス作品研究の幅を広げものである。そしてそれは、ロレンスと個人的交流があり、作家としての視点を共有してきた経験を持つ作者であるからこそ可能な作業であったのではないだろうか。本発表ではこのことを踏まえ、ムアとビナーによるロレンスの伝記の分析を中心に、作品研究における伝記の在り方について考察する。

6. <タイトル> シャドーイングはリスニングのどの処理段階に  
効果を発揮するのか？  
<発表者> 中山誠一 (城西大学)・鈴木明夫 (東洋大学)  
<司会者> 平川敦子 (立正大学)

近年外国語教育におけるリスニング指導法の一つとして、シャドーイングが注目されている。シャドーイングは学習対象となる言語の音声に対する知覚処理を促進し、結果としてリスニング力全般の伸長を目指す指導法である。シャドーイングによりリスニング力全般が向上したという研究報告は数多くあるが、リスニング力のどの処理段階に特に効果があるのかを検証した研究は少ない。本研究はシャドーイングが他の指導法に比べ、リスニング力のどの処理段階を向上させるのかについて検証した。具体的には、シャドーイング群及び統制群を設定し、シャドーイングがリスニング力のどの処理段階を特に伸長させるのかを明らかにするため、理解の三表象（逐語表層、テキストベース、状況モデル）に基づいて作成した事前・事後テスト結果を比較した。実験の結果、シャドーイングはリスニング力全般を伸長させるのではなく、特定の処理段階に効果があることが明らかになった。

第28回大会会場（法政大学市ヶ谷キャンパス富士見校舎敷地内の**外濠校舎**）

交通：JR 総武線、東京メトロ有楽町線・南北線市ヶ谷駅・飯田橋駅徒歩5分、都営地下鉄新宿線・大江戸線市ヶ谷駅徒歩5分、東京メトロ東西線飯田橋駅徒歩5分



大会会場は⑤の**外濠校舎**3階。飯田橋駅方面からはセブンイレブン隣に入口があります。  
懇親会は⑥の**ボアソナードタワー**25階スタッフルーム。

◆ 分科会報告

(分科会担当理事：須田理恵)

「植物と英文学」分科会報告

(分科会代表： 田中浩司)

2008 年

第1回 3月8日 植物と英文学分科会発足 (代表 門野泉)

第2回 6月28日 佐藤治夫

「D. H. ロレンスと生命の樹」

第3回 10月18日 山根正弘

「ジョージ・ハーバートと兄エドワード—オレンジの樹をめぐる」

2009 年

第4回 1月31日 横山千枝子

「アイリス・マードック『ユニコーン』に見られる花々」

第5回 5月16日 塚田英博

「『レディー・オラクル』におけるラッパズイセン：救いの象徴」

第6回 7月4日 君塚淳一

「Kate Chopin と植物と解放： *The Awakening* (1899) を中心に」

(この日を以て、門野から田中へ分科会代表交代)

第7回 10月24日 須田理恵

「D. H. ロレンスと女性—『菊の香り』に見る『母』のイメージと作家の実像」

2010 年

第8回 1月30日 田中浩司

「Flannery O'Connor, “The Geranium” について」

第9回 2月27日 関田朋子

「嬰兒殺しと茨—Wordsworth “The Thorn” から George Eliot, *Adam Bede* へ」

第10回 4月24日 中垣恒太郎

「William Bartram とアメリカ・旅行・植物誌」

「発禁問題研究」分科会報告

(分科会代表： 市川 仁)

第13回発禁問題研究分科会が以下の日程で開催されました。

・日時：5月22日(土) 16:30～

・場所：日本大学歯学部3号館7階 佐藤研究室

・議題：梗概の読みあわせ・執筆要領および今後の出版予定について

この例会で発刊に向けての今後の日程と執筆要領などが決定され、具体的な作業に入っています。

◆ 学術担当より (学術担当理事：上野和子)  
学会誌『英米文化』第41号 初代会長大島良行先生追悼号論文募集

当学会の学会誌『英米文化』第41号の原稿締め切りは10月末日です。

投稿原稿は、担当の上野和子 (〒154-0017  
東京都世田谷区世田谷3-22-21)までお送りください。

## 学会誌『英米文化』投稿規程

### <投稿規程>

1. 本誌は、英米文化学会の機関誌であり、原則として一年に一回発行する。
2. 投稿原稿は、英語文化における文学、文化、語学、英語教育などの論文とし、未発表のものに限る。ただし、学会で口頭発表したものについてはその限りではない。その旨を明記した注を、表紙1頁に入れること
3. 投稿資格 本学会員とし、投稿する当該年度までの会費を完納している者に限る。
4. 応募締め切り 毎年10月末日までに、原稿3部と、記録媒体に入れたファイルならびに略歴(所属学校・機関、研究分野、主要研究テーマ)を学術担当まで送付すること。
5. 原稿掲載の可否 学術委員会による査読を経て決定する。
6. 編集、校正は、編集学術委員会にて行なう。執筆者校正は二校までとする。初校は一週以内、再校は3日以内に返送すること。期限を過ぎても返送されない場合に、学術委員会は掲載を断る権利を有する。
7. 上記以外の案件については、理事会の判断が優先される。

### <執筆要項>

1. 長さ・形式 和文論文は12,000から16,000字数の間にまとめる。A4用紙に38字×25行、フォント12で打ち出す。英文論文も5,000から7,000語数を目安とし、A4用紙に75字×25行とする。
2. 和文論文には、英文表題をつけること。応募論文は、論文の筆署名、所属名(非常勤の場合は(非)、大学院生の場合は(院)と付記)、論文題名、口頭発表に関する注記、謝辞などは表紙にのみ記載し、論文第一ページ以降は題名と本文のみとする。なお、日本名のローマ字表記は原則として姓名の順にする。例 山田太郎 YAMADA Taro
3. 英文・和文の論文は共に、200語程度の英文のAbstractをつける。英文論文については、専門職によるネイティブ・チェックを受けた後に投稿すること。
4. 本文への注釈
  - a) 注は本文の記述順にアラビア数字を附し、後注とする。

b) 外国の人名、書名などは、初出の箇所で日本語の後にマル括弧付で、綴りを併記する。書式の細部に関しては、『MLA新英語論文の手引き』(北星堂)の最新版に遵うものとする。

5. 提出する原稿には、CD、DVD、フロッピーなどの記録媒体いずれかを添付する。

6. 執筆者負担金は『英米文化』出版後、財務委員会で負担額を算定し、執筆者に通知する。執筆者には、掲載誌 5 部と抜き刷り 50 部を進呈する。負担金は一頁につき 2000 円である。

以上

## ◆会計報告・予算

(財務担当理事：山根正弘)

6月12日、例会後の臨時総会で、平成21年度収支会計報告と平成22年度予算(案)が承認されました。会計報告・予算を掲載いたします。なお、会計監査は5月22日、山下信一・河村博旨両先生により行なわれました。

平成22年度年会費の納入がお済みでない方は、この機会に郵便振替にてお願いします。

納入状況は、山根正弘 MasahiroYamane(at)SES-online.jp に問合せ下さい。

年会費 : 5,000円

口座番号 : 00160-7-611777

加入者名 : 英米文化学会

平成 21 年度英米文化学会収支会計報告

平成 22 年 6 月 12 日

財務担当 山根正弘

自 平成 21 年 4 月 01 日

至 平成 22 年 3 月 31 日

単位:円

収入		支出	
摘要	金額	摘要	金額
前年度繰越金	1,688,373	事務局費	224,971
年会費	1,050,000	学術委員会運営費	775,846
学会誌(39号)掲載料	334,000	広報費	106,418
印税	371,694	大会運営費	223,921
雑収入	54,178	例会運営費	113,137
		理事会運営費	34,344
		翻訳プロジェクト費	5,000
		IT担当費	46,548
		出版担当費	20,000
		分科会運営費	58,087
		サーバー賃借料	113,400
		年会費払込手数料	13,240
		予備費	187,864
		次年度繰越金	1,575,469
合計	3,498,245	合計	3,498,245

上記会計報告について、厳正な監査の結果、適正であると認めます。

平成 22 年 5 月 22 日

会計監査 山下 信一

河村 博旨

平成 22 年度英米文化学会予算

平成 22 年 6 月 12 日

財務担当 山根正弘

自 平成 22 年 4 月 01 日

至 平成 23 年 3 月 31 日

単位:円

収入		支出	
摘要	金額	摘要	金額
前年度繰越金	1,575,469	事務局費	250,000
年会費	1,000,000	学術委員会運営費	1,100,000
学会誌(40号)掲載料	484,000	広報費	120,000
印税	350,000	大会運営費	150,000
雑収入	20,000	例会運営費	150,000
		理事会運営費	80,000
		翻訳プロジェクト費	100,000
		IT担当費	50,000
		出版担当費	20,000
		分科会運営費	120,000
		出版助成費	1,000,000
		サーバー賃借料	113,400
		予備費	176,069
合計	3,429,469	合計	3,429,469

◆事務局より 会員消息

(事務局担当理事：大東俊一)

省略

<おことわり>

メールアドレスの表記については、@入りのメールアドレスを検索・流用して迷惑メールを送りつける悪質な業者が、昨今、多いようですので、「@」を「(at)」に置き換えて表記させていただいております。メール作成のときには、お手数とは存じますが(at)を@に置き換えてご送信いただきたくお願いいたします。

英米文化学会会報 第84号 編集／発行：英米文化学会 編集責任者：佐野潤一郎  
〒181-0012 東京都三鷹市上連雀 5-27-23

英米文化学会事務局 〒339-8539 さいたま市岩槻区馬込 1288 人間総合科学大学人間科学部 大東俊一研究室内  
Tel:048-749-6111(office), 03-5399-3395(home) E-mail:ShunichiDaito(at)SES-online.jp  
年会費等振込先：郵便振替 加入者名 英米文化学会 口座番号 00160-7-611777  
学会ホームページ <http://www.SES-online.jp/indexj.html>